

がん研有明友の会 会報

有明の風

第54号

2022年 8月10日発行



ビックサイト



平和への祈り

がん研有明友の会
理事・広報委員長 瀧澤 邦夫

「あれから10年…」以前、私は前立腺がんを患い、開腹手術をした後に計39回の放射線治療を行いました。そして2012年の春に最後の治療が終わった時から数えて、気が付けば10年の歳月が経過していました。現在も2カ月に一度の検査を継続しています。そのようなご縁で友の会の理事・広報委員長を仰せつかり、会報『有明の風』を発行させて頂いております。

さて、この約3年間で世界は大きく変化しました。現在も世界中で猛威を振るっているコロナウイルスにより多くの命が失われました。また、ロシアのウクライナ侵攻によりこの瞬間にも多くの命が失われています。今回は「命」というテーマで私の戦争体験も含めて書いてみようと思います。

第二次世界大戦時、私は5歳でした。当時の記憶で真っ先に思い浮かぶのは、アメリカの爆撃機 B29 が編隊を組んで空の彼方からこちらに向かってくる姿です。空襲警報のサイレンが収まるまで自宅の防空壕に逃げ込み、じっと息を潜める日々でした。薄暗い防空壕内には小さなタンスとテーブルが置かれ、ポツンと一本のロウソクが立ててありました。その灯りにぼんやりと照らされた土壁にコオロギが何匹も止まっていたのを覚えています。日毎に空襲の頻度が上がるにつれ、母と祖母は東京が危険と感じたのでしょう。我々は親戚の住む埼玉県熊谷市に疎開することになりました。疎開先では少しだけ長閑な生活が待っていました。そこで飼っているウサギの餌のハコベ等を採取に行くのが私の役目で、近所の子供たちと一緒に山や丘を駆け回っていました。しかし、その地でも少しずつ空襲警報の頻度が上がってきました。ある時、そのサイレンと同時に眼前に広がる B29 編隊が見えた時には必死に熊谷駅に飛び込んだのを覚えています。その後、雨のように降り注ぐ焼夷弾によって熊谷の民家もあちこち焼野原となりました。火傷を負った人々が逃げまどい、その熱さから逃れようと近くの星川に飛び込む様子は幼心に地獄絵図を見ているようでした。母も祖母も一体どこが安全なのか途方に暮れている様子でしたが、結局、東京に戻ることになりました。私は小さな体にランドセルのように真空管ラジオを背負わされ、一生懸命に東京を目指しました。そして高円寺の親戚宅に立ち寄った際に先日まで疎開していた熊谷の家が全焼したとの報せを聞き、自分達は命拾いしたのだと思いました。

そして1945年8月15日に終戦を迎え、幼心に張りつめていた戦争の恐怖から解放されたように思います。あの時の気持ちを思い返すと、現在のウクライナの子供たちの安寧を願わずにはいられません。命とは限りあるものです。とても脆く、そして儚いものだと思います。私の幾許かの戦争体験と現在のウクライナ情勢を結び付けるのは少し難しいかもしれませんが、いつの世も「命の尊さ」というものは永久不変であると思います。どうか一日でも早く戦争の恐怖から解放され、そして笑顔の日々を取り戻すことができますようにと祈りを捧げます。

これからも会報「有明の風」を通じて、皆様の心に少しでも残るような言葉を伝えられたら幸いです。

がん研有明友の会 第17回書面総会報告

暦の上では秋が始まりました。一年で一番暑い時期を迎えましたが皆様いかがお暮しですか。ご承知の通り世界ではいま、政治、経済、社会、環境等で混迷の状況が続いています。その中であって、新型コロナウイルス感染者数は増減をくり返しており、まだまだ混乱状態が続いております。そのため「がん研有明友の会」の活動も本会が支援するがん研有明病院の感染拡大防止対策に合わせざるを得ないのが現状です。皆様におかれましては、お住いの感染情報に基づき適切に対処していただくよう、切にお願いいたします。

さてこのような状況下、去る4月に本会理事に対し5月の理事会及び6月の総会開催の是非に関し諮問文を提出して意見を募りました。その結果、対面での理事会・会場での総会は中止とし、5月の持ち回り理事会で総会提出議案書を専決処分にて議決し、総会は書面開催承認とさせていただきますのでここにご報告申し上げます。

議事審議の内容、報告承認事項の主なものは次の通りです。ご理解の程、よろしくをお願いいたします。

① 令和3年度（2021年）事業報告

会報は年4回発行、9月の講演会・懇親会は中止、がん研究会へ寄付100万円（三人掛けソファ、傘取り用品購入費に充当）、ボランティア支援室へ寄付5万円、がん検診割引支援継続、持ち回り理事会年2回、持ち回り理事会専決処分による第16回定時総会承認、4つの委員会活動を開催いたしました。

② 令和3年度（2021年度）収支決算報告

会費収入は予算に対し約3.5%増の5,892,205円、支出は会報発行4回、パンフレット増刷、人件費・通信費減、予備費ゼロ等により約9.2%減の5,255,761円となり、約64万円繰越増となりました。

③ 令和4年度（2022年）事業計画

会報発行年4回、講演会・懇親会開催は未定、がん研へ寄付100万円、ボランティア活動支援、がん検診割引支援継続、持ち回り又は対面理事会開催、第17回定時総会は持ち回り理事会専決処分による総会承認、4つの委員会活動随時開催、コロナ禍の推移を注視しながら活動範囲を広げていきます。

④ 令和4年度（2022年）収支予算

収入は前年度決算に対し0.47%増の5,920,000円、支出は前年度決算に対し諸物価高騰等を受け8.7%増の5,920,000円とする収支均衡予算といたしました。また例年通り、がん研究会への100万円の寄付を中心に据えてボランティア支援予算を維持、がん検診割引支援継続、パンフレットの有効活用により会員の維持・増員を図ります。

⑤ 令和4年度（2022年）の役員体制

役員は、本会の活動があらゆる面で制約されている現状に鑑み、理事・監事は留任といたしました。

~~~~ 七夕イベントのご報告 ~~~~

トータルケアセンター 患者・家族支援部 ボランティア支援室 室長
ボランティアコーディネーター/社会福祉士 柴田かおり

日頃より、がん研のボランティア活動にご支援をいただきまして、ありがとうございます。

ボランティア支援室では6月29日～7月8日まで、病院1階のホスピタルストリートで七夕の飾付を行いました。コロナ禍で迎える3回目の七夕イベントでしたが、帝都典礼株式会社様のお力添えにより、今年も多くの患者さんやご家族が七夕コーナーに立ち寄ってくださり、1,232枚もの短冊が笹いっぱい結びつけておりました。毎年の恒例行事ですが、ボランティアの方の活動も再開されていないため、20名近い職員が有志で集まり、200点もの笹飾りを手作りして、七夕コーナーを華やかに温かみのある飾付にいたしました。

皆さまからお預かりした短冊と笹飾りは、がん研の氏神さまでもある門前仲町の富岡八幡宮でお焚き上げをしていただく予定です。皆さまの願いが叶うことを心から願っております。



職員全員が取り組む医療安全

がん研有明病院 医療安全管理部 川尻 恵子



先日、近所の病院を受診しました。採血をする時、検査技師さんに「生年月日とお名前を教えてください」と言われ、生年月日と名前を名乗りました。検査技師さんは採血のスピッツに貼られたラベルを見た後に、内容を繰り返しました。レントゲン撮影の時も同じように確認があり、同じように答えました。診察券と保険証を返却される時も、「確認のために、生年月日とお名前を教えてください」と事務の方に声をかけられました。周囲を見ていると、ごく普通に当たり前のように、どの患者さんにも同じように確認が行われていました。この病院では、患者確認の手順がきちんと決められ、それを全ての職員が理解し行動できていることを実感しました。当たり前のことのように、これだけのことで、患者間違いのリスクは大幅に下がると言われています。

現在の日本における医療安全の取り組みは、1999年1月に発生した肺の手術と心臓の手術をする2人の患者さんを取り違えて手術をするという、患者取り違えの医療事故がきっかけとなっています。この事故をきっかけに医療事故は社会問題となり、これ以降、様々な医療事故が報道されました。消毒薬と血液凝固阻止剤の取り違い注入事故、人工呼吸器の加湿器へのエタノール誤注入事故などが代表的ですが、いずれも患者さんが死亡する結果となっています。これらの医療事故を経験し、今では、医療者個人ではなく組織としての医療安全・患者安全推進が当たり前になっていきます。当院の医療安全も、同じように成長し発展してきました。そんな中、当院では「克服が最も困難な事象の1つ」である「患者誤認の撲滅」を今年の目標に掲げ、医療安全管理部でも取り組みを行っています。20年前の医療事故の原点に立ち戻ったといえれば聞こえは良いのですが、安全・安心な医療の提供の基本は、正しい患者に必要とされる正しい医療が提供されることだと、日々のIAレポートを見て痛感しています。そのためにも、患者誤認はあってはならないものです。残念なことに、医療事故は身近であるいは自分が当事者とならなければ「他人ごと」として捉えられがちという傾向にあります。医療事故の当事者となると当然、誰もが傷つきます。事故の当事者にならずとも、事象をいかに「自分ごと」として捉え、対策を考え実行していける職員が増えることで、重大な医療事故を回避できるのではないかと思います。

医療安全管理部のもう1つの大きなテーマは「人が変わっても継続される体制づくり」です。2025年問題、2030年問題はすぐそこまでやってきました。医療は高度化・複雑化する一方で、働き手が減少していくことは避けられない現実であり、今よりも少ない人員で、質を落とすことなく医療サービスを提供するためには、体制そのものを今のうちから整備することが重要だと考え、日々奔走しています。

マイナンバーカードのように国民一人一人ずつのIDをもとに、データに基づく医療情報の共有やサービスの提供が今以上に行われる時代がすぐそこまで来ています。地域と病院など双方向での連携も密になり、受診せずとも必要な医療が受けられる、ロボットの導入やAI、ICT等の医療分野における実用化もどんどん進んできます。AIの方が間違いのない正確な仕事をする時代でしょう。それでも、人間に対する医療サービスであり、機械を扱うのも人間です。だからこそ今のうちから、どんな時でも「自分ごと」として物事をとらえて対応できる職員を育てていくことが、未来の医療安全を、病院を支えていくことになると感じています。

マイナンバーカードのように国民一人一人ずつのIDをもとに、データに基づく医療情報の共有やサービスの提供が今以上に行われる時代がすぐそこまで来ています。地域と病院など双方向での連携も密になり、受診せずとも必要な医療が受けられる、ロボットの導入やAI、ICT等の医療分野における実用化もどんどん進んできます。AIの方が間違いのない正確な仕事をする時代でしょう。それでも、人間に対する医療サービスであり、機械を扱うのも人間です。だからこそ今のうちから、どんな時でも「自分ごと」として物事をとらえて対応できる職員を育てていくことが、未来の医療安全を、病院を支えていくことになると感じています。

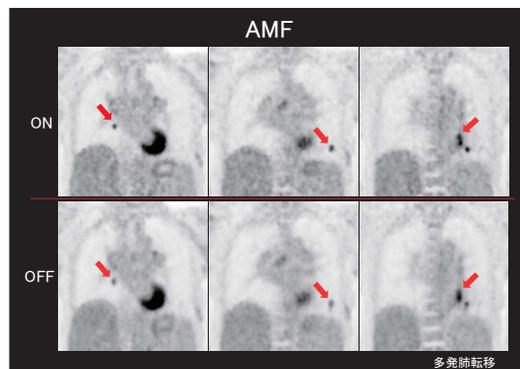
がん研有明病院核医学部の活動について

がん研有明病院 核医学部 部長 寺内 隆司

核医学部では様々な検査を実施しておりますが、主力は何といても PET 検査 (FDG-PET/CT) です。一般にがん細胞は糖代謝が活発に行われており、ブドウ糖をよく取り込む性質があります。そこでブドウ糖類似の RI 製剤であるフッ化ブドウ糖 (FDG) を人体に投与し、がん細胞への取り込みの様子を観察する検査が FDG-PET/CT です。FDG-PET/CT は、がんの存在診断、病期診断、再発診断、治療効果判定など様々な用途で実施されています (ただし、国内では保険適用条件が厳しいのですべての用途に使えるわけではありませんので注意が必要です)。核医学部は 3 台の PET/CT を有し、1 日最大で 34 件の検査を行っており (2022年6月現在)、当院核医学検査の大半を占める検査となっています。



当院の PET/CT はすべて BSREM 法 (商品名: Q-Clear) と呼ばれる新しい画像再構成法を取り入れています。再構成法の詳細は割愛させていただきますが、高画質化に一役買うとともに、FDG の取り込みの評価がより正確になっています。また、3 台のうち 2 台の PET/CT にはデバイスレス呼吸同期システム (商品名: AMF) が搭載されています。PET 検査は呼吸を止めて撮影する検査ではないために、どうしても呼吸による体動によって画像の歪みを生じてしまいます (特に横隔膜近く)。呼吸動作による歪みを補正するには、従来の PET/CT では呼吸による体動を検出する器具を被験者に装着するなどしていましたが、当院搭載の呼吸同期システムはそのような器具をつけることなく呼吸による体動を検出し、リアルタイムに体動補正した画像を作成するので、手間をかけることなく呼吸動作の影響を排除した歪みのない画像を獲得できます。添付画像の矢印で示した病変の輪郭のシャープさや色の濃さが、AMF を作動させることにより向上していることがお分かりいただけると思います。さらに当院においては 2019 年より半導体検出器を搭載した次世代型 PET/CT を導入しております。大袈裟な言い方をすると「いままで見えなかったものが見える」とまで言われているほどの高画質な PET/CT ではありますが、残念ながら 1 台しかありませんので、半導体 PET/CT の能力が最も効果的と思われるケースになるべく使用するように調整させていただいております。今後は既存の PET/CT を半導体 PET/CT に順次入れ替えていく検討も必要でしょう。



以上述べましたように PET 検査の技術はまだまだ発展途上であり、施設や機器の違いや撮像条件の違いなどにより画質にばらつきが出やすい検査です。PET 画像を病変評価のための「共通の物差し」として用いるためには撮像法の標準化をすることにより、画質のばらつきを減らしていくことが非常に重要です。がん研有明病院核医学部においては、日本核医学会や日本核医学技術学会ならびに公的研究費による研究班と連携してこれらの新しい撮像技術や機器を取り入れた PET 撮像法の標準化を目的とした研究活動を行っており、PET 撮像の画質向上に努力を重ねております。

以上述べましたように PET 検査の技術はまだまだ発展途上であり、施設や機器の違いや撮像条件の違いなどにより画質にばらつきが出やすい検査です。PET 画像を病変評価のための「共通の物差し」として用いるためには撮像法の標準化をすることにより、画質のばらつきを減らしていくことが非常に重要です。がん研有明病院核医学部においては、日本核医学会や日本核医学技術学会ならびに公的研究費による研究班と連携してこれらの新しい撮像技術や機器を取り入れた PET 撮像法の標準化を目的とした研究活動を行っており、PET 撮像の画質向上に努力を重ねております。



核医学部スタッフと半導体 PET/CT (2020年1月撮影)

がん研有明病院

部署紹介

第49回

がん研有明病院 リハビリテーション部 副技師長 馬城 はるか

リハビリテーション部 ～シリーズ1～

現在リハビリテーション部では阿江啓介部長の下、理学療法士10名、作業療法士2名、言語聴覚士1名でリハビリテーション業務を行っています。手術や治療により失った機能、低下した機能に対する機能訓練や、これから治療を受ける患者さんの機能低下予防にも積極的に取り組んでいます。

理学療法部門では、整形外科（主に下肢）・乳腺外科・頭頸科の術後リハビリテーション、周術期チーム（PERICAN）の一員として食道外科・肝胆膵外科・胃外科・泌尿器科の術前・術後のリハビリテーションを中心に行っています。作業療法部門では、整形外科（主に上肢）、頭頸科の術後リハビリテーションを中心に行っています。言語療法部門では、頭頸科や食道外科術後の嚥下障害・発声障害に対して、機能訓練や代替法の指導等を行っています。上記以外にも治療の過程で機能の低下がみられた方にはその状態に合わせたリハビリテーションをそれぞれの職種の専門性を活かし行っています。

できるだけ痛みや辛さを軽減し、無理なく且つスムーズに機能回復が図れる様にそれぞれに合った方法を考えながら行なっています。例えば入院中は特に外の空気に触れる機会も少な



いため、天候のよい日にはあえて5階の庭園を散歩しながら気分転換を図りつつ、コンクリートの上を歩くという応用歩行の練習も行うなど、場所や方法も工夫しています。訓練中や休憩中には治療とは全く関係のない、ご自身の仕事や趣味、ご家族の話などをする機会も多く、治療とは離れた話をする時間を持つことで「リハビリ中だけは病院だけど空気が違って楽しかった」とお言葉を多くいただき、比較的個人個人で関わる時間が長いリハビリテーションの強みとして今後もこの雰囲気も保っていかれたらと思っています。

▶ 【次号第55号へ続く】



リハビリテーション部

寄稿

柴田敦巨様 プロフィール

元関西電力病院看護師。2014年耳下腺がん罹患。顔面の神経麻痺、食べ物が食べづらいなどの経験のもと、同様の悩みをもつ仲間と一緒に、新潟県燕市の職人と連携して使いやすいカトラリーの試作にあたり、社内起業チャレンジ制度に応募して起業。当事者になったからこそ気付けた視点を新しい価値と捉え、社会に広げる活動をされている。

猫舌堂 <https://nekojitadou.jp/>

“ピアメイド”で自分らしく生きられる社会を目指して

「ピアメイド」という言葉。初めて耳にされたかと思います。

同じ境遇（＝ピア）の仲間と一緒にデザインという意味で、「猫舌堂」が造った言葉です。私は、2020年2月に(株)猫舌堂を設立し、ピアメイドがあふれる世の中になることをミッションとし、活動しております。

私は、看護師として病院で働いていた2014年12月に耳下腺・腺様のう胞がん罹患しました。計3回の手術と化学放射線治療を受け、その影響で食べることや外見変化の悩みを抱えることになりました。長年看護師をしていましたが、経験して初めて気付くことが多くありました。

食べ物が噛みにくい、口に入れた物がポロポロこぼれる、口の周りが汚れる、飲み込みにくい、などの食べることを中心とした日常生活に支障をきたし、今まで当たり前にしていたことができなくなってしまいました。家族以外の人の前では食事をするのができなくなり、一番辛かったのは「食べられない」ことよりも「一緒に食べられない」という、社会からの疎外感でした。

がんと診断され、1年ほど経った頃、同じ境遇の仲間たちと出逢いました。食べることなどの悩みを「わかるわかる」「あるある」などと一緒に笑い合い、「悩んでいるのは1人じゃない」と思え、生きる力がわいてきました。同時に、様々な社会課題もみえてきて、「世の中は食べることのバリアだらけ」だと気付きました。

例えば、スプーンやフォークなどのカトラリーは、大きすぎる一方、小さいものでも食べ辛い形状がほとんど。「嚥下用」「介護用」などの商品は特別視されている気持ちになるし使いにくい。自分たちが満足できるものはありませんでした。

このような当事者たちの声を集め、デザインして生まれたのが「ピアメイド製品」である、「イイサジースプーン・フォーク」です。いさじ加減なのでイイサジー。



小さく・薄く・平たく・軽い特徴のイイ

サジースプーン・フォークは、社会に溶け込むシンプルで美しいデザインにこだわっています。その優しい口当たり「くちびるが感動する」「大切な人と一緒に美味しい食事の時間を過ごせた」などと、食べることに悩みがあってもなくても、お子様からご高齢者まで多くの方々から嬉しいお声をいただきました。

当事者にならなければ気付けなかった視点、そこには、誰もが笑顔に過ごせる新しい価値があると考えています。これからも「ピアメイド」な製品やサービスを広げ、たとえ食べることなどの日常生活に支障を来すことがあったとしても、我慢し、あきらめることなく、自分らしく生きられる選択肢を増やしていければと考えています。

これからも、仲間たちとの絆を大切に、「ピアメイド」で自分らしく生きられる社会を目指していきます。



紙飛行機

～友の会 会員便り～

東海道五拾七次ひとり旅

私の家系は短命で曾祖父56歳、祖父64歳、父は61歳で亡くなった。祖父、父は肝臓がんで亡くなっており、私もいずれがんに罹り長生きは出来ないのではないかと、そのため早くから「がん研有明友の会」に入会させてもらっている。

2019年、勤めていた会社で早期退職制度が実施され、当時、58歳の私は躊躇わず手を挙げ会社員生活に終止符を打った。退職して直ぐに「後悔しない人生を送るために健康で体が動く内にやりたいこと」を4つ掲げた。

1. 大型バイクの免許を取る。 2. 富士山に登る。 3. 東海道五拾七次(東京・大阪間)を歩く。 4. マチュピチュに行く。

1・2は2019年に叶ったが、その後、新型コロナウイルスが世界中に蔓延し**3・4**は実施を見送っていた。

今年になって国内の新型コロナウイルス感染が下火になり自身の体力にも衰えを感じてきたため、**3. 東海道五拾七次を歩く**ことを決めた。雨の日は歩かない、トラブルがあったら帰る、毎日洗濯する、美しい風景は写真に撮る、地元の人と一日ひとり会話するなどをプランに入れた。

本年4/5 東京日本橋を出発し、1番目の品川宿から57番目の守口宿を通り5/15 大阪高麗橋に到着した。途中、数年帰っていなかった実家に立ち寄り墓参りもでき、友人達が応援に駆けつけてくれたりと充実した40日であった。

今回の旅は1.時間 2.体力 3.お金という3つの条件が揃ったために決行でき、多くの皆さん(田舎の同級生、会社の元同僚、地元の方、家族)から応援を貰い完歩することが出来た。

特に地元の方々にはご親切に道を教えて頂いたうえに一緒に写真を撮らせて貰い思い出深い旅となった。東海道の史跡も巡り教科書に載っていない興味深い史実や美しい風景を目にすることが出来「決行して良かった!」と思っている。今後も今の自分に出来ることに取り組んで行きたい。マチュピチュは遠い。次は奥州街道か中山道か。



駿河湾、千本松原、富士山



藤枝 久遠の松

鮭の香りパン粉焼き

材料 (2人前)

鮭切り身	2切れ (1切れ約80g)	パン粉	大さじ2杯 (約6g)
食塩	少々	乾燥パセリ	適量
白こしょう	少々	好みの野菜	適量
粒マスタード	大さじ1杯 (約20g)		

作り方

- ① 鮭に塩・こしょうで下味をつけておく。
 - ② パン粉は色がつくまでフライパンで軽く炒めた後、乾燥パセリを加えてよく混ぜる。
 - ③ ①の鮭に粒マスタードを塗り、②のパン粉をまんべんなくまぶす。
 - ④ 220℃に熱したオーブンに入れ、15分程度焼く。アルミホイルで包み焼きにしてもよい。
 - ⑤ お好みの野菜を添えて、盛り付ける。
- ※写真は、ズッキーニやパプリカ、じゃがいも、なすなどのミックス野菜をグリルして添えています。

がん研有明病院 栄養管理部

一口メモ

くし形に切ったレモンを添えるとさっぱり食べられます。また、パン粉を炒めた後にエキストラバージンオリーブオイルを加えておくと焼き上がりがカリッと仕上がりに、食感を楽しむことができます。



がん研有明友の会 現在の状況

少し収まりを見せ始めたかと思われた第6波コロナですが感染者数減少が下げ止まりとなり、第7波となる新たな『BA5、XE』株等の感染拡大で、一体いつになったら収束するのだろうかと思わされるこの頃です。

こんな中ですが、がん研有明病院では病院長の強力な指揮下、厳重な警戒で普段と変わらないがん診療が続けられています。称賛すべきことです。

本友の会の活動は、病院とは違い業務ストップは可能ではありますが、何もせずにはいられない、できることは進めていこうと、去る7月6日控えていた広報委員会を開催、今後の会報のあり方について検討会を行いました。

委員会は、マンネリ化脱却のために全体的な見直し、何らかの変更が必要との意見により開催したのですが、結果として、どこをどうするとの具体的な変更決定には至らず、基本的には従来路線を引き継ぐことになりましたが、新しいことを考え改善していかなければならないとの考えで、今後さらに検討をしていくことになりました。

本友の会の会報は会の重要な活動の一つです。内容は会員の皆さまにとってためになる充実したものでなければなりません。皆様のご期待に沿ったより良いものにしていくことが必要です。そのためには皆さまの絶大なご協力を必要としています。会報に対するご意見、ご要望があれば何なりとお寄せいただきます様よろしくお願い申し上げます。

また、会員の皆様の中には会報編集に関わっても良い、一緒に友の会活動に参加しても良い、参加したいとお考えの方もおりかと思います。是非お声がけをいただければと存じます。

有明の風 表紙の写真について

この度の表紙の写真は、病棟統括部土井洋子様よりご提供いただきました。

「コロナ禍、ひっそりとあがった花火に元気をもらいました。」とコメントをいただきました。

*表紙を飾る皆様からの写真をお待ちしております。P7掲載の【紙飛行機】への記事もお寄せいただきたく、ご興味のある方、ご提供いただける方は友の会事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

この一冊

2022年版 『病院の実力』、『いい病院』

10年程前から毎年、読売新聞医療部、朝日新聞出版より発刊されているもので、各病院の診療実績をもとに日本全国の病院名が挙げられランキングが発表されています。

今年版は2月と3月に夫々が出版されており、部位別、手術数、放射線治療、薬物療法のこと、その他最新の医療の状況等、盛り沢山の記事が載せられています。

どちらが良いか、この一冊、ともに定価1000円程度の月刊誌様のものですが、見るに値するものとして評価できると思います。病院選びの際は是非一度ご覧いただくと良いでしょう。



有明友の会 入会のご案内

有明友の会は、がんで命を落とさないようにするために、がんに関する知識を深め、情報を共有し、がんに気をつけよう、がん研究の支援により、進んだ医療が受けられるようにしようということを目的としております。

その活動は、年4回の会報発行、公開講座の開催などの他、日本で最も歴史のあるがん研究会の事業支援をすることとしており、年会費は5,000円(個人、一口)となっております。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

がん研有明友の会会報 発行元・事務局

〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31 がん研有明病院内 TEL: 03(3570)0561 FAX: 03(3570)0562

HP: <http://ariaketomonokai.org> E-mail: tomonokai@jfc.or.jp



◀友の会ホームページ